



おおくぼ

学校教育目標 ゆめにむかって かしこく やさしく たくましく
～ふるさとを愛し、志高く生きる、心優しい大久保の子ども～

令和2年5月1日第2号

さいたま市立大久保小学校

さいたま市桜区五関21

048(854)7636

男子119名女子112名 計231名

心を一つに

校長 金子 要一

「宣誓。東日本大震災から1年。日本は復興の真っ最中です。被災された方々の中には、苦しくて心の整理がつかず、今も当時のことや亡くなられた方を忘れられず、悲しみに暮れている方がたくさんいます。人は誰でも、答えのない悲しみを受け入れることは、苦しくて、辛いことです。しかし、日本が一つになり、その苦難を乗り越えることができれば、その先に必ず大きな幸せが待っていると信じています。だからこそ、日本中に届けます。感動、勇気、そして笑顔。見せましょう、日本の底力、絆を。我々、高校球児ができること。それは、全力で戦い抜き、最後まであきらめないことです。今、野球ができることに感謝し、全身全霊で正々堂々とプレーすることを誓います。」

これは、東日本大震災の翌年、2012年3月に行われた第84回選抜高校野球大会の開会式における、宮城県立石巻工業高等学校野球部主将の選手宣誓です。

石巻市は被災市町村のなかで最多の約4,000人が犠牲になりました。石巻工業高校の野球部員は全員無事でしたが、自宅が被災したり、或いは親類や親友を亡くした部員もいました。主将も自宅が津波で全壊し、そのうえ、小学校の時、ともに白球を追いかけた同級生を亡くしました。荒れ果てたグラウンドを率先して整備しながら、「野球などしている場合なのか。」と悩み続けました。このような辛く苦しい日々を送っていた石巻工業高校も、ようやく野球の試合ができるようになりました。そして、選抜大会の前年の秋季大会で準優勝を果たし、21世紀枠で甲子園出場を勝ち取りました。

「1年前は野球すらできないと思ったのに、甲子園に立って、メッセージも伝えられることは、夢のようです。感謝の気持ちを忘れず、最後まで諦めない戦いをし、被災地代表として自分の気持ち、仲間の気持ちを込めた選手宣誓を考えたい。」と、主将は21世紀枠で選ばれた今回の選抜大会出場と、選手宣誓を引き当てた心境を語っていました。

選手宣誓の冒頭では、彼を含め野球部員もその被害に遭った当事者であるにもかかわらず、今も計り知れない悲しみや苦しみを抱えた人々が大勢いると述べています。自分たちが辛く苦しい立場でありながら、それを乗り越えようとする姿を通して、日本中に感動、勇気、そして笑顔を届け、さらに、世界中に最後まで諦めない日本の底力と絆を見せようと誓ったのです。

現在、全世界的に新型コロナウイルスが蔓延し、日本は感染拡大防止のため「緊急事態宣言」が発出されるという、今まで体験したことのない事態になっています。学校も3カ月にも及ぶ臨時休業といった未曾有の状況に直面しています。この長期にわたるお休みは、これまでの春休みや夏休みとは全く違い、行楽地などに遊びに出かけることも出来ない不自由な生活を余儀なくさせられる、決して楽しくはない休みです。

しかし、今は我慢の時です。みんながやりたいことを我慢して、「普通の生活」を呼び戻すことが求められているのです。今こそ日本全国のみんなが心を一つにし、必ず戻れる「普通の生活」を待ちましょう。

先ほどの選手宣誓の中でもこう言っています。「日本が一つになり、その苦難を乗り越えることができれば、その先に必ず大きな幸せが待っている」と。